
リリカルクラッシャー 魔法とザ・ヒートが行く

ヒート&クラッシャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルクラッシャー 魔法とザ・ヒートが行く

【Nコード】

N9308P

【作者名】

ヒート&クラッシャー

【あらすじ】

ジ・エーデルを倒し世界を崩壊から救った部隊「ゼウス」は解散し、各々の道を歩んでいた
その中の一人である「ランド・トラビス」もまた同じであった
彼はまた親方を探しながら修理屋家業を行っていた
そんなランドの自称妻の「メール・ピーター」が拾ってきた赤い寶石で物語は始まる

プロローグ（前書き）

こんなコラボがあっても良いと思う
そんな感じで書いた作者です

ブローグ

「えー、こちらは従業員のスマイルと誠実なサービスが売りのさすらいの修理屋ピーター・サービスで御座います。小型バイクから大型ランドシップまで何でも修理致します」

町の大広間でマイク片手に大柄な青年が声高らかに宣伝を行っていた赤い髪に無精髭を蓄えダークグリーンのランニングシャツに作業用ズボンとかなりラフな格好をした青年である

彼の名は「ランド・トラビス」

かつてゼウスの一員として戦い世界を崩壊から救い出した英雄の一人である

しかし当の本人はそんな気など微塵も無く、また世間も彼が英雄だとは露にも知らないのが現状である

まあそのお陰で何の気兼ねも無く商売が出来るのだが

そして彼の隣には彼の愛機でありマイホーム？である大型修理用ロボット「ガンレオン」が立っていた

オレンジの機体色に機体各所には修理用の工具が納められている正に修理用のロボットである

しかし、本人が使うせいか修理屋と言うよりもむしろ「壊し屋」の方が様になってしまっているのである

大きな声では言えないが、実はランドは今は「ザ・ヒート」と名乗っているが一部の世間からは「ザ・クラッシャー」と言われているしかし本人の前でその言葉を口にする際は鉄拳の一発を覚悟した方が良い

何故ならそれを聞くと本人は凄く怒るからだ

「へい、毎度お！これからもご最^{ひいき}顧にいい」

修理を終えたランドは客に向かって自慢のヒートスマイルを送る
本人はこのスマイルは100点満点と思ってるらしいが、側から見るとかなり暑苦しい

その為送られた客も苦笑いを返して足早に去っていく
ランド自身ももうそれには慣れたらしく深く突っ込まないでいた

「さてと・・・結構稼げたな」

ランドは今日の稼ぎを見てニンマリとした

まずまずと言った具合である

崩壊の危機が去ったとは言え、まだ各地では紛争が少なからず起きている

そしてそれが元で修理屋を訪ねる者も少くないのだ

勿論電化製品の修理もお手の物である

しかしランドに飛び込む依頼は修理よりむしろ用心棒や戦いの助っ人と言ったのが多いのである

「おつかしいなあ、俺は見ての通り修理屋なんだけどなあ？何で変な依頼ばっか来るんだ？」

ランドがしきりに首を傾げる

そりゃあんたの通り名が原因でもあるんだよ

しかしそれに気づかないランドは何故そうなのかと疑問に思っていた

「ま、いつか・・・今日はここで開きにして美味しい酒でも飲みに行くかなあ」

仕事を終えてルンルン気分で片付けをするランド

彼の楽しみと言えば仕事後の一杯である

勿論其処にスタイル抜群で綺麗な女性がお酌をしてくれれば言う事

無しである

しかし、世の中そんな良い事などある筈も無く、ランドの近くに居る女性と言えば

「やつほく、ダーリン！」

「何だ？メール」

半ば呆れたようにランドが振り返る

其処にはピンク色の長い髪をした少女が居た

背丈から見れば12歳に見えるが、彼女は列記とした16歳なのだ
彼女の名は「メール・ピーター」

自称ランドの嫁である

しかし本人は余り乗り気じゃないらしいが

また、先の苗字で分かると思うがピーター・サービスは彼女の父親
が始めた家業である

今ランドとメールは二人して親方を探している

だが世の中は世知辛い物であり、即ち働かざる物食うべからず

要するに生きていく為には働かないと駄目なのだ

その為こうして行く先々でこうして修理屋を開いて資金を稼いでい
ると言う訳なのだ

「仕事は終わったぜ。さつさと飯にしようぜ！俺も腹減っちゃったよ」
「うん、分かった・・・って、そうだ！それよりダーリンこれ見て
よ！」

メールはそう言って自身が握っていた物を見せた
それは赤い球状の宝石のような物であった

「何だこりゃ？どうせならブルーストーン拾って来いよ。そんな石
ころじゃ一円にもならねえぞ」

「もあ、ダーリンったら夢が無いわねえ！これ凄い綺麗だよ。首飾りにしたら似合うかなあ？」

「はいはい、似合いますよ・・・だからさっさと飯にしてくれよ」

「ぶう！ダーリンったら女心分かってないんだから！」

「そう言うのはもっと大人の女性らしいプロポーズになってから言え！」

二人のこうした会話は毎度の事でもある

勿論何度か本気で喧嘩した事はある

しかしその度に必ず最初に折れるのはランドである

本人が言うにはガキ相手に本気で喧嘩する訳には行かないと言ってるが本心ではメールを大事に思っているからでこそでもある

その為それ以上酷い喧嘩になる事は滅多にない

長年一緒に旅をしてきた者達だからこそその成し得る関係と言える

「それよりダーリン見てみてよお！これ普通の石とは違うんだからさあ」

「五月蠅いなあ・・・俺は仕事後だから腹減ってるんだけどなあ」

そう言つてメールに無理矢理見せられた赤い宝石を見た

確かに今まで見た事が無い物質にも思えた

だが、やはり値打ちは薄そうだ

やはり飾り物にしかないだろう

少し残念であつた

もしこれが値打ち物なら叩き売って酒代に出来たのだが

と、メールに聞こえないように心の中で愚痴っていると突如宝石が眩い発光を放ちだした

「な、何！」

「こらメール！お前口クでもないもん拾ってきやがったなあ！」

メールが驚きランドが半ば呆れ果てたように声を上げる
そんな二人は愚か隣にあったガンレオンまで巻き込んで閃光は消え
去った

そして、其処には先ほどまでであったガンレオンもランドとメールの
姿も何処にも無かったのであった

「うう・・・いてて・・・何処だ？此処は」

目を覚ますと其処は見慣れぬ建造物の中であつた

造りが見た事が無い作りであつた

何処か機械的ではあるが、明らかにそれだけでは無い

他に何か神秘的な物が使われていた

それはランド自身も何となくだが分かったのだ

だが、一体何故

きつとあの時メールが拾った赤い石ころが原因なのだろう

全く、余計な物拾つてきやがって

半ば面倒臭そうに頭を掻き篦る

しかしこれ以上此処で寝てても風邪引くだけだなと内心納得して立
ち上がる

「さつて・・・まずははた迷惑な事をしでかした奴を探さないとな

あ
」

辺りを散策し始めるランド

と言っても辺りには扉らしい扉などなく殆ど一本道であった

とりあえず真っ直ぐに道なりに進む

すると目の前に巨大な扉があった

「何か訳ありっぽい扉だなあ」

いかにもってな感じで佇む扉を前にランドが呟く

とりあえずランドは扉に手を掛けてみる

見かけとは裏腹に扉はあっさり開いた

そして中に入って見た

其処でランドが目にした物は、無数のカプセルであり、その中には何と大勢の『女性』が眠っていたのだ

しかも裸で

「うおおおお！こりや眼福・・・じゃねえや！こりや青少年には刺激が強すぎるぞ！・・・って、俺もう青年じゃん！」

と、一人でノリツツコミを演じていたランド

まあ確かに彼がそうなるのも無理は無い

何故ならカプセルで眠っている女性達はどれもスタイル抜群の美人だったのだから

「しっかしどうなってんだ？カプセルの中はビールみたいな液体で一杯だし・・・こいつら呼吸しなくて平気なのか？」

カプセルをコンコンと叩いてランドは呟く

その際になるべく女性は見ないようにしていた

余り近くで見るとランドの男センサーが反応して鼻血ブーになってしまうからだ

「此処で何をしている」

「ん？」

すると背後から声が聞こえた

ランドはその声を聞き振り返る

すると其処にはランドと同じ位の背丈の青いショートカットの女性が居た

しかもピチピチのスーツを着てである

「うおおおおおおおお！これまた美人が居たあああああああああ
あああ！しかも際どいスーツ着てるうううううう！括れた腰に魅力的な胸とかスタイルでまくりいいいいいいいいいいい！」

「・・・何だこの男は？」

一人意味不明に叫びまくる男に女性は首を傾げていた

「貴様、何故此処に居るんだ？」

「嫌、それが全然分からないんだよなあ。俺も突然飛ばされちまつてよお」

女性の問いにランドが笑顔で答えた
それに女性は眉を顰める

「どうやら嘘はついてなさそうだな」

「おう！俺は可愛い子ちゃんには嘘はつかないぜ・・・と、そうだし何時までも名無しじゃカッコがつかないな。俺はランド・トラビス。人呼んで『ザ・ヒート』だ」

と言ってランド自慢のヒートスマイルを送る
それを見た女性が引き攣った顔をした

（あ・・・暑苦しい）

それが女性の正直な気持ちであつた
それを見てランドも何時もの事だなあと深く詮索しなかつた

「お前が名乗つたのなら私も答えねばならないな。私は『トーレ』
と言つ」

「トーレか・・・結構可愛い名前だなあ」

「そうか？」

「ところでよお、このカプセルに入つてる可愛い子ちゃん達は何だ
？」

ランドはそう言つて周りにあるカプセルを指差した
それを見てトーレが口を開く

「これは私の言つてしまえば妹達だ」

「マジか！こんなに妹居るの？お宅のお袋さん凄いハッスルしたんだなあ」

正直に驚くランド

それにトーレは眉を顰める

こいつもしかして別世界から来たのか？

そつでなければ今の発言に疑問を感じる筈である

何より自分を見た最初に取り行動はこの世界の住人なら土下座して
命乞いをする筈である

なのにこの男は平然としているのだ

余裕なのかはたまた何も知らないのか

とにかくこの男の身柄を確保する必要があるそうだな
そう思えた時であった

『トーレ、居るかい？』

「ドクター」

「ドクター？誰こいつ・・・ってか何も無い所からテレビが出た！
凄い手品だなあ」

トーレの目の前にモニターが現れ其処にドクターと呼ばれる男性の
顔が映った

紫の髪に黄色の瞳をした白衣を着た青年である

んでもって、ランドはそれを見て度肝を抜かれる感じになった

無理も無い話である

目の前に突然映像が映し出されるなんてランドの居た世界ではまず
不可能な事だったのだから

「ドクター。何でしょう？」

『其処に居る彼を私の所に案内してくれないかい？』

「宜しいのですか？素性の分からない男を連れてきても」

『心配ないさ。私も彼に興味があるからね』

「分かりました」

二人で簡単な通信を終えてモニターを切った
そしてランドを見る

「ドクターがお前を呼んでいる。大人しく付いてきて貰おう」

「おう、美人のお誘いなら喜んでお供するぜ」

「・・・ついでに言わせて貰うがその暑苦しい笑顔どうにかならないのか？」

（素で言われたの初めてだな）

内心ちょっと驚いたランドだが顔には出さないでいた

「それは無理だな。このヒートスマイルは俺の十八番だからな」

「スマイルが十八番！お前は一体何者だ？」

「只の修理屋さ」

そう言つて再びヒートスマイルを送る

余程このスマイルに自身があるのだろうが
送られてる側からするとかなり暑苦しい

（放つておこう・・・これ以上相手にしてもこちらが疲れるだけだしな）

額を押さえながらトーレはランドをドクターと呼ばれる者の待つ部屋へ案内した

「此処がそうだ」

「お、サンキューな」

案内してくれたトーレにランドは礼を言った

そして扉を開ける

其処には巨大なモニターとそれを見る一人の男性が移っていた

「やあ、良く来たね」

「あんたがドクターって人なのかい？」

「ハハハ、それは私の愛称みたいな物だよ」

「成る程なあ、俺のザ・ヒートみたいなもんだな」

そう言つてランドは青年にもヒートスマイルを送つた
それを隣で見たトーレはまた引き攣つた顔になる
しかし青年はその笑顔を面白そうな顔で見つめる

「ほお、君は愉快な顔が出来るんだねえ」

「な！あんたが始めてだ！俺のヒートスマイルを見ても暑苦しいなんていわないのは」

「そうかい？私はその笑顔は良いと思うよ」

「あんた・・・良い奴だなあ」

何故かドクターと呼ばれた男とランドは気があつた
それを横で見ていたトーレは額を押さえていた

「折角だ、名乗らせてくれよ。俺はランド・トラビス。さつきも言つたが人呼んでザ・ヒートだ」

「ほう、良い名前だねえ。私はジェイル・スカリエッティと言う。まあこの格好から分かる通り科学者だよ」

「ま、そんな格好してる奴は大概科学者つてのは同じみたいだな」

ランドはジェイルの格好を見て科学者だなあと推測出来たらしい

「ところでよお、此処にピンク色の髪した背丈が俺の半分も無い女の子来てないか？」

「ピンク色？」

「小さい背丈？」

それを聞いてジェイルとトーレは揃つて顎に手をやる

どうやら知らないようだ

そんな仕草を見てランドも溜息をつこうとした時であつた

『こらあ、ダーリン！私が居ない間に浮気したら承知しないからねえ！』

「うおわあ！メール、どうしたんだ？ペラペラじゃねえかお前」

突如ランドの目の前にメールの映像が映し出された
しかも其処に映ってるメールはかなりご立腹である

『ドクター・・・すみません』

「ウーノか、その子は一体どうしたんだい？」

『いえ、それが突然現れた物でして』

ウーノと呼ばれた女性も参ったような顔で言っていた
その間もメールとランドは口論を続けていた

「大体お前があんな石ころ拾ったからこうなったんだろっ？」

『良いじゃない！女の子は綺麗な物には弱いもんなの！』

「お前がそれ言っただけで様にならねえよ。せめて此処に居るトーレちゃんやウーノちゃん位の美人になってから言えよ！」

「ムキーーーーーーー！まだ言うか！私だって絶対大きくなつて大きな胸や括れた腰を絶対ゲットするんだから」

「ま、頑張れや」

その光景は正に夫婦喧嘩の様であつた

「二人は仲良いんだねえ」

『そりや勿論！だって私とダーリンはまだ籍入れてないけど夫婦なんだよお』

「へいへい、あんたも適当に流してくれ」

メールの言葉にランドは呆れた顔になる

それとは対照的にジェイルは笑っていた

「分かった。仲の宜しい夫婦だって事は分かったよ。とってもお似合いだよ二人とも」

『いやだあ、ジェイルさんってお上手う』

「あんた、役者だよ」

ジェイルの言葉にメールは上機嫌になりランドは呆れた顔になった
しかしこの出会いがランドとメールにとって初めての経験になる事になる

そう、二人は生まれて初めて『魔法』と出会ったのである

しかし、それはこれから話と言っ事で

プロローグ（後書き）

次回も宜しく

ヒート1 ザ・クラッシャーは禁句（前書き）

更新が遅れて申し訳ない
ってな訳で始まります

ヒート1 ザ・クラッシャーは禁句

「ガンガンレオン〜ガンレオン〜ラ〜ン〜ド〜クラッシャー」

此処は何処かの格納庫

其処でランドは奇妙な唄を楽しげに歌いながら目の前に転がっている残骸を弄くっていた

どれも酷い損傷をしていた

ある物は何か巨大な金槌のような物で潰されたようであり、ある物は何か巨大な柱で貫かれたようであり、とにかく損傷が酷かった

しかしランドはそれを鼻歌混じりに修理していたのであった

普通の人間なら余りの損傷で青ざめるのであったがランドにとって
は日常茶飯事でありしかも初めての技術を弄くれるのだから職人冥利に尽きる物である

その為ランドは修理しながらその機械を分解してその技術を見ていたのであった

「しっかしこれを作った人はすげえなあ・・・俺関心しちゃうぜ」

ランドは修理しながら分解しながら感動していた

しかし修理とは名ばかりであり今ランドがやってる事はハッキリ言
って『修理』では無く『改造』であった

既に今の機械は元の形を留めておらずともない形になっていた

「気に入ってくれましたか？ドクターの作品に」

「ん？あんたは確か・・・ウーノさんか」

「はい・・・一つ聞いて宜しいでしょうか・・・何してるんですか？」

ウーノはランドの目の前にある変わり果てた奇妙な機械を指差した

「ああこれ？どうせジャンクだろうと思ってなあ修理しながら分解してた」

「これが修理ですか？私には性質の悪い改造にしか見えませんが？」

確かにウーノの言うとおりであった

今ランドが楽しそうにやっているのはどちらかと言えば修理ではなく改造である

しかもかなり悪質な改造である

どのような姿かは遭えて言わないがハッキリ言って趣味が悪いとだけ言っておく

「しっかしこんなすげえ物をぶっ壊す奴等って一体何者だあ？」

「機動六課です」

「機動六課？聞いた事ねえ組織だなあ？何それ」

ランドが首を傾げる

それにウーノも無理は無いなと一人納得していた

「機動六課を知らないのも無理は無いでしょう。あれはつい最近出来た組織なのです」

「ふーん、しかしそれって相当強いんだなあ」

「ええ、桁外れに強いです」

その言葉にランドが何時に無く真剣な顔になった

桁外れに強い、恐らくその言葉がランドの中に響いたのだろう

「ま、俺はしがない修理屋だから関係ないな」

「そうですね・・・ところで、先ほどドクターが貴方を呼んでいま

したよ」

「ん？兄弟がか？」

ランドがドクター・・・即ちジェイル・スカリエッツィをそう呼んでいた

兄弟

ランドが友と思った相手に使う言葉である

かつてその言葉を使った男が一人居ただが、それは此処では語らないでおく

「ランドさん、出来れば兄弟などと言う言葉ではなくドクターと呼んでください」

「んな固つくるしいの面倒じゃん、それに俺はこっちの方が呼びなれてるからそんでオツケイ」

「いや、あんたがオツケイでもこつちがNGなんですよ！それといい加減その暑苦しい顔止めてください！妹達に悪影響を及ぼしたらどうするんですか？」

流石のクールフェイスを装っていたウーノも我慢の限界に来たのか額に青筋を浮かべて怒鳴る

しかしランドには何処吹く風であった
全く気にして無い

片耳の穴に指を突っ込んでホジホジしていた
一発ぶん殴ってやろうかとウーノは思ったが止める事にした
女性の柔な拳で倒せる男では無いと分かっていたからだ

「さあて、早く兄弟の所に行かねえとな」
「ですから・・・もう良いです」

最早修正不可能と理解したのかウーノがその場で深い溜息を吐く

そしてそれに気づかぬままランドは一人格納庫を後にした

「やあ、やっと来たね」

「ダーリン遅い」

此処はとある一室

辺りには一面奇妙な装置やらボタンやらがある

その中にジェイルとメールが居た

「悪い悪い、ちいつとばかりしもよおしちゃってさあ」

「まあ、レディが居るんだからそう言う発言は控えてよねえ」

「へいへい、お前がもう少しグラマーになったら控えてやるよ」

無い胸を張り上げて怒っているメールにランドは手をヒラヒラさせて言った

そしてそのままジェイルに近づく

「んで、用って何だ？兄弟」

「これを見てくれ」

「ん？」

ジェイルに言われるがままにランドは目の前を見た

ガラス張りの向こうでは一人の少女が先ほどランドが分解した機械と戦っていた
赤いショートカットの髪型でこれまたピチピチのスーツを見に纏っている

そして右腕にはゴツイナックルのような機械が、そして両足にはローラーズケートのような物が取り付けられていた

『おおおおおおおりゃあああああああああ！』

少女が咆哮する

そしてそのまま風の如くフィールド内を駆け回り機械を次々と破壊していく

その様は凄まじいの一言であつた

「へえ、最近の子供つてのは皆凄いなあ・・・あんな芸当が出来るのか？」

「気に入ってくれたかい？ランド君」

「ああ、大した見世物だぜ。あれなら町で披露しても稼げるんじゃないかねえの？」

これまた暑苦しいスマイルをしながらランドが呟く
それを見てジェイルがフツと笑みを浮かべる

「あれは芸当では無いよ。まあ披露するのはもつと先だけだね・・・ところでどうだい？彼女と一つ手合わせしてみてくれないかい？」

「ああ？俺とお？何でまた」

「君には何処か不思議な力を感じるんだ。その力を私も見てみたいと思つてね」

「うーん、俺の本業は修理屋なんだけどなあ・・・ま、たまには体を動かすのも悪くないかな」

そう言ってランドは快く承諾した

「ダーリン、間違ってもあの子にセクハラ行為や卑猥な事しちゃ駄目よ！」

「わあってるよ。それに俺は年下には興味ねえよ。どうせやるならウーノさんがトーレさんが良いからな」

「やっぱりやる気だったんだ！この浮気物お！」

怒ったメールが額に青筋を大量に浮かべてその辺にあった機材やらなにやらを持ち上げてランドに投げつけた

「ちょ、待てメール！それ投げたら兄弟が困るだろう！ちょ、待て！悪かった！俺が悪かったてば」

それを必死に避けながらランドが謝罪するもメールは聞く耳持つておらずひたすら投げ続ける

それを見ていたジェイルも流石に眉をひくつかせていた
結果的に部屋内はメールが大暴れしたせいで全ての機材が瓦礫の山と化してしまったのであった

「後でランド君に修理手伝って貰う方が良いか」

残骸となった機材を見ながらジェイルが呟いていた

ランドはジェイルに言われた通り先の演習場に来ていた
其処には無数の機械の残骸が転がっておりその中央には先ほどの少女が立っていた

見ると少女の目つきはかなり鋭い物であった
まるで狂犬のようである

黄色の瞳がギロリとランドを睨む
しかしランドは全く動じなかった

かつては自分もあれ位鋭い目つきをしていただけあってか余り動じないのであるう

頬を指でなぞるように掻きながら少女の前まで歩み寄る

少女はその時改めてランドの背の高さに驚いた
かなり大きいのだ

恐らく自分の二倍は無いがそれに近い位はありそうだし
しかしすぐに顔を戻してランドに対して口を開く

「てめえがああランド・トラビスか？」

「おう、んでお前は誰だ？」

「あたしはノーヴェってんだ！お前の事はトーレ姉から聞いてるよ。
かなりの変人みたいだな」

「おいおい、俺は変人じゃねえよ。人呼んで『ザ・ヒート』ってんだぜ」

そう言つてランドはノーヴェに対してご自慢のヒートスマイルを見せた

（あ……暑苦しい……）

そんなランドのヒートスマイルを見てノーヴェが眉をひくつかせた
しかしすぐに元に戻った

「つてか・・・次の私の相手つてお前か？」

「ん？まあそうみたいだな」

「おいおい、本当に大丈夫なのかよ？ 私まだ調整が不十分だから手加減とか出来ねえぞ？」

ノーヴェが参ったと言った感じの顔をしながら頭を掻き毟る
それに対しランドがこれまた暑苦しい笑顔をして口を開く

「大丈夫だって。女の子の拳でくたばるほど俺柔じゃねえからよ」

ブチ

その一言がノーヴェの中の何かが切れた
そして

「上等じゃねえか？そのてめえの暑苦しい面を一度と拝めないようにしてやるよ」

「おお、中々気合入ってるじゃねえか？良いぜ、何時でも来いよ」

ランドが手をくいくい動かして明らかに挑発していた

それに更にノーヴェの額に青筋が浮んでいた

そして

[illegible]

とノーヴェが叫びながら右手に装備されたガンナックルが高速回転してランドに向かって来た

そしてその一撃は真っ直ぐにランドに直撃した

「ぐおっ！」

ランドが声を上げてそのまま壁の端に吹き飛んでいく
壁にぶつかったランドを中心に砂煙が舞い上がる

砂煙のせいでランドの姿は確認出来なかった

だがそれでもノーヴェは確信していた

もう生きてはいない

並の人間ならまず生きてはいられない

そう思っていた

しかしそうではなかった

「あいててて・・・つつう、久々に良いの貰った気分だぜ」

「な！」

何と其処には全く無傷のランドが居た

しかも摩ってるのは殴られた頭ではなくぶつかった後頭部であった
つまりノーヴェの一撃は大して効いてないと言う事を意味していた

「て・・・てめえ・・・私の一撃は効いてないってのか？」

「へん、俺をのしたかったら親方の拳骨並の一撃を出してこねえと
無理だぜ」

「誰だよ親方って？」

いきなり聞き覚えの無い人物を出されて動揺してしまうノーヴェで
ある

しかしそれ以上に自分の一撃が全く効いてないと言う事にノーヴェ
は驚いた

普通なら並みの人間なら頭が潰れてもおかしくない筈である
今の一撃は確実にヒットした筈だ
勿論手に命中した感覚だってある
なのに何故あの男には全く効いてないのだろうか
もしかしてこいつも同じ・・・筈はない
もしそうだとしてもドクターは女性の型しか作らない
勿論アレは男性型もあるのだが色々と問題があつたらしく破棄され
たと聞いた気がする
となれば一体何故

「おゝい、もうお仕舞いかあ？」
「そんな訳ねえだろうが！」

ランドの間延びした声に対し額に青筋を浮かべて猛烈なラッシュを
掛ける
右ストレート、左回し、左フック、右ロー、その他多数
等など多彩な技を繰り出す・・・が、その全てがランドに軽く捌か
れてしまう
全て片手でまるで軽く払うかのように渾身の一撃をかわすのだ

「やれやれ、俺の本業は修理屋なんだがなあ・・・」
「お前が修理屋？どう見ても見えねえぞ！どっちかって言ったらお
前はむしろ壊し屋の方が似合うんじゃないの？」

ノーヴェがからかうように言った
しかしその時彼女は気づかなかつた
ランドの中の何かが切れ始めた事に

「あつれゝ、おかしいなあ？お兄さん何か幻聴でも聞こえたのかな
あ？俺修理屋なのに壊し屋って言われたような」

笑顔を装っているが眉はヒクヒク動いている
要するに我慢してるのだ

それを見て面白そうになったノーヴェが更に続ける

「言つたよ。この壊し屋」

ピクピク

その一言に更に眉が動く

だが未だに笑顔を保っている

其処へノーヴェがラツシュをしながらトドメの一言を言い放った

「お前はザ・ヒートじゃねえ！どっちかって言ったらむしろ『ザ・クラッシャー』だ！」

ブチン

その一言がランドを完全に切れさせた

そしてその直後ノーヴェに向かって猛烈な一撃が飛び込んで来た

「なっ！」

咄嗟に両腕をクロスしてガードの姿勢を取り更に結界まで張った
しかしその一撃は結界を簡単に突き破りそのままノーヴェを吹き飛ばす

「ぐうっ！」

ノーヴェは痛みの声を上げた

背中が天井に叩きつけられたのだ

そしてそのまま大地に落下する

凄まじい一撃であった

まともに食らっていたら只ではすまなかった筈だ

ヨロヨロと立ち上がる

しかしその前にランドが立ちはだかった

分かってると思うが既にランドの顔は笑ってない

もうその顔は半分ザ・クラッシャーが入っていた

「てめえ・・・良くも俺をそんな名で呼びやがったなあ」

「な・・・何だこいつ・・・急に強くなりやがった」

「俺をそんな風に言った以上てめえは今から大解体だ！ネジ一本も残さず分解してやるから覚悟しやがれ！」

「やつばてめえ壊し屋じゃねえか！」

「それを言うなああああああああああああああああああああああ
ああ！」

完全に切れたランドは手が付けられない状態である

一撃の速度こそノーヴェより僅かに劣るがその威力は桁違いである
何しろ防御結界がまるで紙の様に破られてしまうのだから

そして捌こうにもノーヴェの細腕ではランドの豪腕は防げず打点を
ずらすしか出来ないのだ

その為徐々にダメージが蓄積していく

反撃しようにも怒り狂ったランドにはノーヴェの一撃など蚊が刺し
た程にも効いてないのだ

そして遂にこの戦いにピリオドが打ち下ろされた

「ぬおおおおおおおりゃああああああああ！」

「うわわ！」

何とノーヴェの後ろ首と腰の辺りを持つて頭上に持ち上げたのだ
そしてそのまま空高く舞い上がる

「く……この野郎！離せ！離しやがれえ！」

[illegible]

もがくノーヴェなどお構いなしにランドが思い切りノーヴェを地面に叩きつけた

それが決着であつた

演習場一帯に巨大なクレーターが出来上がっており、其処には元に戻ったランドと目を螺旋状に回すノーヴェの姿があつた

ランドはそんなノーヴェを見て

「やっべえ……またやり過ぎちまつたよお」

と、バツの悪い顔をしながら呟くのであった

*
*
*

ランドとノーヴェの戦い振りはジェイル、トーレ、ウーノ、そしてメールの一同が見ていた

そしてメール以外の面子は明らかに青ざめていた

「ま……まだ調整不十分とは言えあのノーヴェを生身の人間が……」

・
」

「し・・・信じられない」

「彼は一体何者なんだ？」

三人が信じられないと言った顔をしている横でメールが呟いた

「勿論、私のダーリンよ」

この日、ナンバーズとスカリエツティ博士は「絶対にランドに対して『ザ・クラッシャー』とだけは言わないでおこう」と心に深く刻み込んだのであった

因みにその翌日ランドとメールは二人がぶち壊した機材の修理をしたそうである

ヒート１ ザ・クラッシュァーは禁句（後書き）

少しやりすぎたか・・・

ヒート2 男はヒートスマイル、女はエンジェルスマイル？（前書き）

今回はランドのヒートスマイルでまくりです

ヒート2 男はヒートスマイル、女はエンジェルスマイル？

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」

その日、此処はナンバーズのトレーニングルーム

その中で一人物凄い形相でサンドバックを叩く少女が居た

ノーヴェである

しかもそのサンドバックには落書きレベルで書かれたランドと思わしき男の顔が書かれている

そのサンドバックをノーヴェは怒りの籠った感情で殴り続けていた

「あの暑苦しい野郎に負けた！戦闘機人の私が生身の人間に負けた・

・絶対ぶち殺す！」

そう硬く誓ってノーヴェは握り締めた拳をサンドバックに叩きつける

サンドバックを吊るしていた鎖は千切れてそのままサンドバックを

遙か後方に吹き飛ばした

その拍子に布は破れ中であつた砂は辺りに散らばってしまったのだ

「はあ・・・はあ・・・」

サンドバックを叩き終ってノーヴェは肩で息をしていた

それでもまだ殴り足りないのか今度は付近にあつたトレーニング器

具に八つ当たりの如く叩き壊していく

その様を長女のウーノはモニター越しに見ていた

その隣にはトーレも居た

「ノーヴェの奴・・・荒れてるな」

「ランドに負けてからずっとああよ」

二人がモニターを見る

其処には完全に怒り狂ったノーヴェがトレーニングルームを滅茶苦

茶にしてる光景が映っていた

それを見て二人は頭を抱える事になったのだ

丁度その頃、ノーヴェの標的となった我らがランド・トラビスはと言うと

「にゅにゅ」

鏡に向かってヒートスマイルを行っていた

その拍子に鏡が音を立てて割れる

しかし本人はご満悦であった

「うっし！今日も俺のヒートスマイルは完璧だあ！今日も一日何か良い事ありそうだぞあ」

嬉しそうにランドは呟く

そして何時もの如く格納庫へ向かうのであった

最近ジェイルの作ったガジェットが傷だらけになって帰って来る回数が頻繁に上がっていたのだ

その為ランドはそれをひたすら修理していたのだ
と言っても別に頼まれた訳では無い

半分は趣味である

そのせいかランドが修理したガジェットは何故かどれも原型を留めてないのである

ハッキリ言ってランドが修理したガジェットは使い物にならないのでその場に飾っておくしか無いのである

まあ廃品回収に出さないだけマシと言えばマシかも知れないが
そんなこんなで今日も鼻歌混じりにランドが格納庫を訪れた

すると其処には一人の少女が立っていた

（何だ？背丈からしてメールより下つぱいなあ・・・でも、ありゃきつと八年したら別嬪になるな）

その少女の後姿を見てランドが思わずにやけた
だがそれは決して今の少女を見てにやけたのでは無い

あの少女の八年後を見てにやけたのだ
恐らくこの場をメールが見たら間違いなくランドはスパナで殴られるだろう

あれ結構痛いのだ
すると少女がランドに気づき振り返る

少女は最初ランドを見てその巨大さに驚くもすぐに元の表情になり
ランドを見る

「貴方がランド・トラビスさん？」

「ああ、人呼んでザ・ヒートだ！宜しくな嬢ちゃん！！」

ランドはそう言つて少女に対してもご自慢のヒートスマイルを送る
普通なら暑苦しいと言うのだが、この少女は違っていた

「ランドさんって、素敵な笑顔をするんだね」

何とこの少女はランドのヒートスマイルに対し「素敵な笑顔」と言
つたのだ

それには流石のランドも度肝を抜かれた

「は・・・初めてだ！俺のヒートスマイルを褒めてくれたのはメー
ルに続いてお前で二人目だ！」

「そうなの？でも私はその笑顔好きだよ」

「グハアアア！！！」

少女のその一言を食らったランドが胸を両手で抑えてその場に倒れる
それに驚いた少女が慌てた顔でランドに近づく

「大丈夫？ランドさん？」

「ま・・・負けた！俺のヒートスマイルも・・・あんたのエンジエ
ルスマイルの前には形無しだ・・・今日からヒートスマイルはお前
が受け継いでくれ！」

「それは無理」

ランドのそれに少女はアツサリ否定した

それを見て何故だと思っ顔になったランドに対し少女はこう言った
「ヒートスマイルはランドさんだけの物だもん、それは私には出来ないよ」

「あ・・・あんだ・・・すげえなあ・・・とてもメールより年下には見えねえぞ？」

「そう？」

少女は首を傾げる

その様もとても可愛かった

それを見たランドは思わず本当に八年後が楽しみになってしまったと、それは置いておいて

「そつえばまだあんだの名前聞いてなかったなあ・・・何て言うんだ？」

「私？・・・私はルーテシア・・・ルーテシア・アルビーノって言うの」

「へえ、良い名前だな、宜しくなルーテシア」

「あ、それだと長いからどうせならルウで良いよ」

「そつか、んじゃ呼ばせて貰うぜルウ」

「うん」

ランドに名前を呼ばれて思わず笑顔になるルーテシア

其処へ

「ダーリン！」

「ん？何だメール」

「ダーリン！私と言う愛妻が居ながらそんな少女に手を出してえ！」

「ご、誤解だメール！俺は別に手なんか出してないぞ！只ルウとヒートスマイルについてだなあ」

「ムキイ！もう仇名で呼び合ってるじゃん！ダーリンの浮気者おおおおおおおおおおお！」

額に大量の青筋を浮かべたメールが巨大なレンチを持ち上げてランドを追い掛け回す

メールがレンチを振り回す度に付近に置かれたガジェットが粉々に砕けていく

「た……タンマだメール！此処で暴れたら兄弟が困るじゃねえか！」

「ジェイルさんを出したって駄目だからねえ！今日と言つ今日は勘弁しないんだからあああああああ！」

「だから誤解だつてばあああああ！誰か何とかしてくれええええええええええ！」

ランドが必死に逃げ回りながらそう叫ぶ

しかし今の中にはランド、メール、そしてルーテシアしか居らず、しかもルーテシアはそんな一人を見て笑ってるだけであつた

因みに、ランドとメールが暴れまわってる光景はそのままモニター越しに見てるウーノ、そしてトーレにも見えた

「……こっちでもか」

「……こっちでもね」

お互いにそう言い会つて二人は更に頭を抱える事になった。そして、それは別室に居るジェイルもまた同じであつた。

「……後でランド君に手伝って貰わないと……」

思わずそう呟くのであった

*
*
*

「いてててえ……. たく、メールの奴本気で殴りやがってえ」

ランドは頭を抑えながら立ち上がった

辺りはメールとの追いかけてで既に滅茶苦茶になっており最早修復不可能までになっていた

「やべえなあ、後で兄弟に謝っておくか」

ランドは一人そう呟くのであった

そしてとりあえず時間も時間だったので今日は寝る事にした

「そんじゃまずは一つ風呂浴びて飯食って寝るかなあ」

誰も居ないと言うのにそう呟きながらランドは格納庫を後にする

因みにメールとルーテシアは既に居なかった

ランドを気絶する位の一撃でぶん殴った後スッキリしたのかそのままの足取りで格納庫を後にしたのだ

と、言う訳なので風呂場まではランド一人で歩いていた

すると、突如ランドが歩いている通路の壁をまるで通り抜けるかの様に一人の少女が現れた

「おわ！何だ？手品か？」

「え？誰？」

突然大声を出す物だから少女も驚いていた
そしてランドと少女は互いに見る

ライトグリーンの髪をしたこれまたピチピチのスーツを着ていた
（しかし此処の奴等って皆スタイル良いなあ・・・メールにも少しで良いからこれ位あって欲しいよなあ）

口には出さないが心の中でそう思うランド
すると少女がランドを見て口を開く

「あ、もしかしてあんたがああザ・クラッシャー？」

「ああん？誰がザ・クラッシャーだってえ？」

少女は何の脈絡も無いいきなりランドをザ・クラッシャーと呼んでしまった

それを聞いたランドが明らかに不機嫌になる

すると少女は首を傾げる

「おかしいなあ・・・確かノーヴェがそう言ってた筈だけどなあ」

「ノーヴェ？それってもしかして赤い髪のキツイ目つきの娘か？」

「そうそう、あ！あたしはセインってんだ。さっきは御免ね、間違
って言っちゃったよ。ザ・ヒートだっけ？」

「そうそう、俺は人呼んでザ・ヒートだ！……！」

そう言ってこれまたヒートスマイルを見せる

真っ白な前歯がキラんと輝く

ハッキリ言おう

「かなり暑苦しいね」

「うん、自覚はしてる」

「じゃあ何でやめないの？」

「俺が気にいってるから」

そう言って再びヒートスマイルをする

それに完全にドン引きになるセイン

かなり顔が引き攣ってます

「と……ところでどうしてランドは此処に来てるの？」

「ああ、折角だから一風呂浴びようと思ってよ」

「一風呂浴びて……男湯はあっちだよ」

「え？マジ！」

「マジマジ」

「こいつはウツカリだったぜ！サンキューな、セイン」

去り際にこれまたヒートスマイルを送るランド

それに最早青ざめるセインであった

「あ……暑苦しいどころか……胸焼け起こすよ」

自身の胸を抑えてそう呟くセイン

そしてふと、自身が女湯と思っていた箇所を見た

しかし、其処にはミッドの文字で「男」と書かれていた

「あ！間違えた」

どうやらセインは勘違いをした様子である

そして、ランドが向かったのは……当然「女湯」である

しかし、ランドにこの世界の文字は読めないのである

この後ランドはどうなったかは……遭えて書かない事にする

ヒート2 男はヒートスマイル、女はエンジェルスマイル？（後書き）

次回・・・遂にガンレオンが登場します

ヒート3 修理と破壊は紙一重…だと思っ(前書き)

皆さんお待ちかね!!!

いよいよあのガンガン行くロボットが登場しますよお！

ヒート3 修理と破壊は紙一重…だと思う

その日、ランドはまた何時ものように残骸になったガジェットを修理と証した改造に鼻を鳴らしながら楽しんでた

しかもその日増しにその改造の質の悪さが増していたのである

今では最早これの何処に美的センスがあるのかさえ疑われる位であったのだからそれにはもうナンバーズの皆も呆れ果てていた

だが、そんなランドの美的センスに興味を示す者もまあ少なからず居るわけであって

「ランド」

「よお、ルーテシア。今日もまた俺の修理したガジェットを見に来たのか？」

「うん」

頷くルーテシアを見てランドはまた暑苦しい笑顔を見せた

最早お馴染みであるのかルーテシアはランドの笑顔がお気に入りなのかは定かではないがとにかくルーテシアはランドの笑顔には全く動じないのだ

「うんうん、ルーちゃんもダーリンのヒートスマイルが気に入ったんだね」

隣で工具を弄っていたメールがランドほど暑苦しくないが可愛い笑顔を見せる

しかし今回の来客はルーテシアだけでは無かった

「ヤッホー、ランドオ、居るツスかあ？」

ランドを呼ぶ声が聞こえた

声色からして少女を思わせる声であった

振り返るとノーヴェと似たような赤い髪をした少女が居た
だが、ノーヴェと違い何処か明るい顔をした少女である

ランドはその少女を知っていた

「よお、ウエンディじゃねえか」

ランドはその少女を見る

そしてウエンディと呼ばれる少女もランドを見る

そして二人共同じようにヒートスマイルをする

暫しの沈黙が辺りを包み込む

やがてそれに満足したのか・・・

「流石だなウエンディ、お前のヒートスマイルも中々様になって来たじゃねえか」

ランドがウエンディのヒートスマイルを見て満足そうな顔をする
それを聞いてウエンディもご満悦である

そう、彼女ことウエンディはランドのヒートスマイルを一目見て気に入って自身も真似するようになったのだ

そして今ではランドから太鼓判を押されるまでに至ったのである
そのせいかこの二人は意外と馬が合うのだ

また、ランドと馬が合うのはウエンディだけではない

「ういゝつす、ランド居るう？」

「よお、セインも来たのか？」

「うん、今日はどんな風にガジェットを改造してるのか見に来たん
だ」

そう、彼女セインもまたランドが気に入ったのである

しかし、前回ランドに間違えて女湯を教えたのは彼女である

その為ナンバーズの女子達には彼女等の固有武装でメッタメタにされたが何より痛かったのはやはりメールの張り手である

あれを食らった後ランドは半日は痛がっていた程である

何時の世も嫁は強いのだ

「もうちょっと待っててくれよ、もうすぐ完成するからよ」

そう言つてランドがこれまた微妙な姿になったガジェットを弄くつ
ている

もしこれを作り主であるジェイル博士が見たらもしかしたら発狂する
かも知れない

そう思えた

それ程の物が今日の前にあるのだ

ランドはそんな意味不明な造形物を楽しそうに弄くり回している
それを彼女達は楽しそうに見ている

なんとも微妙な光景であつた

しかしまあ弄くつているのが廃棄処分予定のガジェットなので特に
咎める気は無いのは事実であるが

「何だ、皆揃つて何をしてるんだ？」

そう言つてやってきたのは銀色の長い髪に片目を眼帯で隠している
少女であつた

しかし、言つておくが背丈はメールと同じ位である

「お、チンクも俺の力作を見に来たのか？」

「それが力作なのか？」

チンクと呼ばれた少女はランドが自慢するガジェットであつた物を
見ていた

相変わらず常人には理解し難いではえである

しかしそれをランドは誇らしてに見せておりその場に居合わせてい
る物達は何故かその作品を気に入っていた

つくづくランドとは奇妙な男だな

そうチンクは思えた

それで軽く溜息を付くもまあとりあえず本題に移ることにした

「ランド・トラビス。ドクターが呼んでいる・・・一緒に来て欲しい」

「ん？兄弟が呼んでるのか？こりやすぐに行かねえとな」

最早ランドがジェイルを兄弟と呼ぶのは定着してしまつた

その為今では誰もその呼び方を咎める者は居ないのだ

ランドがジェイルに呼ばれていると言うので作品の完成を後回しに
して行く事にした為にその場に居合わせたメンバーは非情に残念そ
うな顔をしていた

が、ランドが「すぐに戻つて完成させるさ」というと皆またパット
明るくなつたのだ

それを見てつくづくこの男は不思議な感じだなあとチンクは思った
と言う

ランドはチンクと共にジェイルの待つであろう研究室を歩いていた
その道中ではやはり眠ったままの彼女達の姉妹が居るのだが最早ラ
ンドは気にならなくなった

と言うかなるべく見ないようにしていたのだ
何故見ないようにしているかだつて？

読者の皆様・・・想像して欲しい

辺り一面マツパの女性がカプセルの中で寝てるのだ
そんな光景を普通の男が見たらまず鼻血流出物である
現にランドも最初の内は鼻血を流していたのである

しかしその後メールの手により更に酷い目にあつたので今は見ない
ようにしているのだ

「ついたぞ、ランド」

「ふう・・・どうやら今回も耐え抜いたぜ」

一人呟きながら額の汗を拭うランド
一体何がどうしたのか？

そう思い首を傾げるチンクであつたがとりあえず聞かない事にした
どうせ下らない事だと思えたからだ

そんなチンクの胸中など露知らずでランドはジェイルの待つ部屋の
扉を開ける

「入るぞお、兄弟」

「やあ、わざわざ呼び出してしまつて悪いねえランドくん」

「お待ちしてました。ランドさん」

其処にはジェイルの他に彼女の秘書であるウーノも居た

「いやあ、相変わらずあんたは羨ましいねえ、こんな美人な姉ちゃん達に囲まれてハーレム気分たあ最高じゃないの旦那あ」

「そうかい？私は何とも思わないのだが」

ランドの言葉にジェイルは首を傾げていた

そんなジェイルにランドはカルチャーショックを受ける

「何だと！お前こんな美人な姉ちゃん達に囲まれてるんだぜ！普通の男なら泣いて喜ぶシチュエーションじゃねえか！」

「ふむ、考えておくよ」

「相変わらず硬いなあ兄弟は」

「君が柔軟なのさ」

「おいおい、褒めるなよお」

照れ隠しに頬を染めるランド

そんなランドにウーノが「褒めてませんよ」と付け足したのは言うまでもない

「んで、今日は何の用だい？また誰かと腕試しってか？」

「いや、今回君を呼んだのはこれだよ」

そう言つてジェイルが懷から取り出したのはあの赤い宝玉であつた

「あ、それメールが拾つた奴じゃねえか！」

「今日彼女に許可を得て調べてみたんだが・・・どうやらこれはデバイス（ヴァイノ）の様なのだよ」

「スパイス？」

「ランドさん、デバイスです」

ランドのボケに再びツツコミを入れる

それは勿論彼女である

「それで、もしかしたらこれは君が使えるのではないかと思つてそれで君を呼んだのだよ」

「へえ、この石ころにそんな秘密があつたんだなあ」

宝玉を見ながらランドが呟く

どう見ても只の石ころにしか見えないのはしょうがないのだがともあれ物は試しである

そんな訳で今回もまたランドは訓練場にやってきた

其処には今度はランドを囲むように数体のガジェットが立ち並んでいた

皆球体のようにまん丸である

そして体からは二本の大きなアームと無数のコードらしき物が生えていた

その中央にはカメラアイのような物があつた

「ほお、今回はこいつらが相手かぁ・・・んでもよぉ・・・これどうやって使うんだ？」

赤い宝玉を見てランドが呟いていた

確かに使い方が全く分からなければどんな凄い武器でも只のガラクタである

『聞こえるかい？ランドくん』

「お、兄弟か？」

そんなランドにジェイルの声が響く

だがそこで再びランドは疑問に思った

そう言えば今の自分は通信機の類を持っていないのだからにどうしてジェイルの声が聞こえるのだろうか

その疑問は彼自身が教えてくれた

『君が持っているデバイスのお陰で君に直接会話できるのだよ』

「マジ？それって凄いなあ」

素で驚くランドさんであつた

「んで、驚くのはコレ位にしておいてだ・・・どうやってこれ使うんだ？兄弟」

『簡単だよ、それを持ってそのデバイスの名前を呼べが良いのさ』

「名前え？んなの俺知らねえぞ」

『だったら今から君がその名前を決めれば良い事だよ』

ジェイルが簡潔に言うのでランドは頭を捻って考え出した

その場で胡坐あぐらをかき腕を組んで考え込む

そして考え付いたのか彼の頭に電球が付くような活写が見えた

「そうだ、お前の名前は今日から『ガンレオン』だ！どうせ今の場にいなえしその変わりって事でな」

ランドが誰に話してるわけでもなくその宝玉に向かって言う

するとその宝玉はたちまち閃光を放つ

「おおあ！なんじゃあ？もしかして気に入らなかったとか？」

慌てるなかランドは忽ち閃光に包まれる

そして閃光が晴れると其処には見慣れぬ物が立っていた

オレンジ色のカラーリングが施された機械を思わせる姿であり

手には背丈ほどある巨大なレンチを持っており両肩には小型チェー
ンソーを思わせる物が取り付けられていた

「うお！これって・・・俺が「ガンレオン」になっちまったのかあ
？」

其処には確かにかつてブレイクワールドでランドが使っていたガン
レオンが居た

だが大きさは2mほどしかない

操縦方法もまるで違っており、まるでランド自身が動いている感覚
であった

『うむ、どうやらそれが君の騎士甲冑バリアジャケットのようだね』

「ば・・・バリアフリー？何じゃそりや？」

『バリアジャケットです。ランドさん』

再びウーノのツッコミ炸裂です

『さて、無駄話も其処までにしてそろそろテストを行うとしようか』

「おう、何時でも良いぜ。こいつらを解体すれば良いのか？」

『そうだ、好きなように破壊してくれたまえ』

「嬉しい事言ってくれるねえ兄弟。よっしゃ！今回だけは派手にぶ
っ壊してやるぜえ！」

何故か何時も以上に生き活きとなるランドを見てウーノが思わず（やはり彼は壊し屋の方が似合う気がするのだが）と思ってしまうたのであった

まず数体のガジェットを様子見な感じで放つ

「まずは軽く準備運動からだな」

ガンレオンは腰からスパナを取り出すとそれを目の前に迫る手頃な一体のガジェットに向かって放り投げた

放物線を描いて飛んでったスパナはガジェットのカメラアイを潰しそのまま機能停止にまで追い込んでしまった

更にぶつかつた拍子に上空に舞い上がったスパナをすぐさま駆け寄つたガンレオンがキャッチして側に居た二体を叩き壊す

「お次はこいつだあ！」

今度はもう片方にスパナを取り出しそのスパナ同士を連結させた

そしてそのまま引き伸ばすとまるでヌンチャクのようなになったのだそれを華麗に振り回し寄ってきたガジェットをまるでカンフー映画のワンシーンのように弾き飛ばす

「うっし、大分体も暖まってきたなあ・・・んじゃ本日のお楽しみはコイツだぜ！」

まるで楽しみにしていた物を食べようとするかのような顔でランドが取り出したのは両肩に取り付けられたチェーンソーであった

二つのチェーンソーが唸りを上げて刃を回転させる

そして足に装備されたローラーを起動させて訓練場を高速で駆け抜ける

その勢いで斜線上にあるガジェットを次々と切断していく

「ハッハッハアアア！真つ二つにしてやるぜい！」

上機嫌でランドが叫ぶ

（まるで悪党ね）

それを見ていたウーノが声に出さずそう思っていたやがて訓練場にはガジェット一体だけが残っていたするとランドは持っていたチェーンソーを元の肩に戻して側にあつ

た巨大なレンチを手に取る

「さあて、そんじゃ本日のメインイベント！大型艦用のレンチをお前に味合わせてやるぜい！」

滅茶苦茶嬉しそうに大型レンチを両手で持って残っていたガジェットに向かつていく

そして思い切り叩きつけた

すると叩きつけられたガジェットは上空に舞い上がる

それをレンチでキャッチする

そしてそのまま全体重を掛けて地面に叩きつける

「ガンレオン！スーパープレエス！！！」

ネーミングセンスゼロとも思える叫びを上げてガジェットを忽ち屑鉄に変えてしまった

もう修理は不可能な状態である

「ふう・・・久しぶりに良い汗掻いたぜえ」

額の汗を拭う仕草をしてガンレオン状態のランドは言った

それを見ていた一同は驚きの顔である

「凄まじいですね・・・ドクターの作った試作型とは言え？型をそんなに容易く破壊してしまうとは」

「フム、彼が入れば私の目的も達成し易くなるな」

訓練場に映るガンレオンを見てドクターことジェイル・スカリエツ

ティは微笑むのであった

ヒート3 修理と破壊は紙一重…だと思っ(後書き)

次回はランドが機動六課と関わっちゃいますよお

ヒート4 潜入！機動六課（前書き）

潜入と言ってもスパイっぽい潜入ではないですよ

ヒート4 潜入！機動六課

「さ」

ランドが鼻歌混じりに何かを焼いていた
ワイルドな体の男が焼いた魚を食べる
かなり絵になる

が、今ランドが焼いているのは魚ではなく巨大な「トカゲ」であつた

「ランド・・・貴様何を食ってるんだ？」

「何って、トカゲの燻製だぜ」

「ちよつと待て！それ食えるのか？つてか、それは食べる物じゃないだろう！」

ランドがトカゲを焼いているのを見てトーレが信じられないと言つた顔をしていた

無理もないだろう

戦闘機人とは言え彼女も女性なのだ

その為目の前でこんな事をされたら驚きもする

だが、ランドには何処吹く風である

全く気にせずに肉にかぶりつく

「うん、火加減も上々、肉付きも申し分なし、こりや美味しいぜ」

「気持ち悪い・・・」

そりゃそうなるだろう

食事中の皆様・・・御免なさい

「おや、食事中だったかな？」

そう言つてスカリエッティの出した映像には4人の少年少女、そして二人の女性の戦う姿が映し出されていた
それを見たランドが驚愕した

「こ、こいつあ凄え・・・」

「そうだろう。彼女等の戦闘力は並外れているからねえ・・・」

「よくもまあこんな美人揃えたなあ」

「つて、驚く所は其処かい！」

ビシツとツツコミを入れるトーレ

最早彼女はツツコミになつてますね

「んでよお、こいつら何者だ？」

「管理局の所持する部隊で名前は「機動六課」と言つそうだよ」

「機動六課つて・・・あの兄弟の作ったガジェットを何時もボロボロにしてくる奴等か？」

「そしてそれをお前がガラクタに改造してるしな」

「ヒデエなあトーレ。あれは改造じゃなくて修理だよ」

「何処が修理だ！性質の悪い改造だろうが！」

トーレが怒鳴る

其処でスカリエッティが本題を述べる

「君に頼みたいのは彼女達の元へ潜入して欲しいのだよ」

「え？俺が？」

「残念だが私は顔を多く知られすぎて。下手に歩けば大変な目にあつてしまうのだ。それに娘達はまだ出せないのね。其処で君に頼みたいのだ」

「良いぜ、兄弟の頼みなら引き受けてやるぜ」

ランドは立ち上がって胸を叩く

「だが、どうやって潜入するんだ？下手な侵入方法ではすぐに怪しまれるぞ」

「其処は俺にドーンと任せてくれ」

場所は変わり、此処は機動六課の訓練スペース

其処では今日も今日とて六課メンバーが厳しいトレーニングに勤しんでいた

その中で新人達を指揮する女性が居た

栗色の長い髪をサイドで束ねた綺麗な女性「高町なのは」である

「はい、これで午前の訓練は終了。休憩してからまた午後の訓練に行くよ」

『はい！』

なのはの言葉に新人達は元気良く答えた

そして皆が隊舎に戻っている道の前に奇妙な二人連れが居た

一人は作業着を着ているが上半身は緑色のランニングシャツしか着ておらず肌は褐色の良い色をしており体つきは正にガチムチ・・・

もとい筋肉質である

赤い髪をした背の高い青年である

そしてその隣には同じように作業着を着ている桜色の髪の少女が居た

「え？誰？あの人達」

「さ、さあ・・・」

なのは達は何故あんなのが隊舎の前に居るのか不審がつている
しかしあそこに行かねば中に入れないので仕方なく声を掛ける事にした

「あのお・・・」

「ん？もしかしてあんたら機動六課の人か？」

「はい、そうですけど・・・貴方は？」

「俺か？俺はランド・トラビス。人呼んでザ・ヒートだ」

ランドがそう言うてご自慢の「ヒートスマイル」を送る

それを見た一同の返答は「暑苦しい」であつた

「それで・・・何の用でしょうか？」

「いやぁねえ、実は俺達此处で出張サービスをしようと思って、それで巷で噂の機動六課さんの所に着た訳ですよ」

（出張サービス！なんの？）

一瞬一同がそう思った

見るからに修理屋か何かに見えるそうなのだがこのランドと言う男はどう見ても修理よりは破壊の方が向いてそうである

「ちょっとダーリン！何鼻の下伸ばしてるのよ！」

「何だよメール！大事なお客さんの前だぞ！少し静かにしてろよ！」

横に居た少女がランドを小突く

「えつと・・・貴方は？」

「始めまして。私はメール・ピーターって言います。さすらいの修理屋「ピーターサービス」の社長代理で、この人、ランドの妻です」

「え？」

「ああ、適当に流してくれ」

メールの惚気に一同は点になった目でランドを見てランドは呆れた顔をする

「折角ですけど、そう言ったサービスはお断りしてますので」

「げ、マジ！此処の世界だところ言うのってやってないんだなあ」

ランドが口をへの字に曲げる

だが、先の言葉の中にある言葉があった

「此処の世界」

「あの、ランドさん」

「ん？何だ」

「もしかして、ランドさんって異世界から来たんですか？」

「うーん、そうなるのかなあ？俺そう言うの良く分かんねえんだよなあ」

「なのは、もしかしてこの人達「次元漂流者」なんじゃ」

隣に居た金髪の女性がなのはに言う

「そうみたい、だとしたら・・・ランドさん。少しお話を聞かせて貰っても良いですか？」

「お、仕事の話しだな。全然OKだぜ。何なら飯に付き合っても良いぜ」

「いえ、お話だけで良いです」

ランドの誘いになのははやりわりと断る

そしてそんなランドの足をメールが思い切り踏むのであった

場所は変わり、此処は機動六課の部隊長室

其処には一人の女性が座っていた

なのはのより少し濃い色のボブカットの髪型をした女性である

「はやてちゃん、この人が次元漂流者の・・・」

「ランド・トラビスだ。宜しくな」

「メール・ピーターです。宜しくお願いします」

ランドが自身の名前を言ってヒートスマイルを送り、メールも満面の笑みで自己紹介をした

「アハハ、楽しい人達やなあ。私は八神はやてって言います。此処機動六課の部隊長をさせてもらってます。んでこっちの二人が」

「始めまして。高町なのはと言います」

「フェイト・T・ハラOWNと言います」

なのはとフェイトが自己紹介をする

ランドはそんな三人をマジマジと見つめていた

「良いなあ、出るトコ出てて凹むとこ凹んでるムチムチのワガママボディの可愛い子ちゃん・・・やっぱこう言う子が良いよなあ」
「ダーリン！」

鼻の下を伸ばしてたランドにメールのキツイ一撃が下された
それを食らい机に叩きつけられるランド
それを苦笑いで見つめるなのはとフェイト
そして大爆笑するはやて

「それで、暫くランドさん達の身柄は私達で預からせて貰いますね」
「良いぜ、修理なら任せてくれよ。こう見えて俺の本業は修理屋だからよ」

（ぜ、全然見えへん）

（修理屋と言うより解体屋の方が似合うよ）

（寧ろ壊し屋の方が似合うと思う）

脳内で次々と酷い事を連発するのはたち

あんたら一言言っぞ

ランドにそれ聞こえたらマジで壊されるから気をつけなさい

その頃、新人メンバーは食堂で食事をとっていた

「それにしても、さっきのあの人達一体どうしたんだろうねえ？」

青いショートカットの少女が山盛りのパスタを食べながら呟いていた

「話しからすると次元漂流者みたいよ」

オレンジのツインテールの少女がそう呟く

「って事は、此处で保護する事になりますね」

赤い髪の少年が付け加える

「それにしても、さっきの笑顔凄かったですね」

ピンク色の少女が脳裏に焼きついたあの笑顔を思い出す
それに釣られて三人も思い出す

そして苦笑いを浮かべる

「暑苦しいよねえ」

「確かに」

「でも、僕は素敵な笑顔だと思いましたよ」

「「え！」」

少年の一言に二人はギョツとする

すると其処へランド達がやってきた

「お、此処開いてるな」

「もお、ダーリン早い」

（（う、噂をすれば！））

少女二人はランドを見た

その視線を感じたのかランドは二人を見る

そして満面のヒートスマイルを送る

背筋を何か冷たい物が走る感覚を感じた

何故だろう

自分達はあのヒートスマイルが苦手なようだ

「さてと、此処座って良いか？」

「良いですよ。丁度二つ開いてますし」

「やったねダーリン」

「おう」

少年の言葉にランドが頷きメールも喜びながら席に座る

「そう言えばランドさんって別の世界から来たんですか？」

「ああ、こいつが拾った石のせいでこっちに来ちゃったんだ」

「もお、私が悪いみたいな言い方しないでよお」

メールが頬を膨らませる

それを四人が笑ってみていた

「あ、自己紹介してなかったね。私スバル・ナカジマって言います。宜しくね」

「ティアナ・ランスターと言います。宜しくお願いします」

「エリオ・モンディアルです。宜しく願います」

「キャロ・ル・ルシエと言います。宜しく願います」

「ランド・トラビスだ。宜しくな」

「メール・ピーターです。宜しくね」

それぞれが自己紹介を終える

「それにしても何でメールさんはランドさんの事を夫って言ってるんですか？」

「だって私とダーリンは結ばれる運命なんだもん」

「勝手に決めるな」

メールの言葉にランドが釘を刺す

どうやら本気にしてないようだ

「へえ、メールちゃんって幾つなの？12歳位」

「え？私16だよ」

『ええええええええ！』

メールの一言に一同が驚く

しかし驚き過ぎではないかい？

「あ、御免」

「良いの気にしないで。私もう慣れたから」

謝るスバルにメールが笑顔で答える

それから何気ない会話をしながら昼食を終えるのであった
その後四人は訓練があると言うので訓練場に向かった
そして、ランドとメールは割り当てられた部屋に入る

「うゝん、一緒の部屋なんて本当の新婚さん気分」
「はいはい・・・と、定時連絡しないとな」

ランドが一人呟いて通信機を作動させる
其処にはスカリエッティの顔が映っていた

「侵入は成功したみたいだねランドくん」
「あつたぼうよ。美味い具合に潜入できたぜ兄弟」
「流石だよ。では引き続き調査を頼むよ」
「合点だぜ」

頷いて通信機を切る

「さてと、今日はもう遅いし寝るか」
「そうだね。おやすみ、ダーリン」
「はいよ、おやすみ、メール」

お互いにそう言いながらランドは下のベット
メールは上のベットで寝る事になった
そして、これからランドとメールが機動六課に何を起こすのか
それは誰も知らない分からないのである

ヒート4 潜入！機動六課（後書き）

果たしてどうなるか？

それは作者も知りません（オイッ！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308p/>

リリカルクラッシャー 魔法とザ・ヒートが行く

2011年10月7日03時13分発行